

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

電力王・福沢桃介の壮絶人生！波瀾万丈のススメ  
～先人たちの底力・知恵泉/  
福沢桃介アンコール放送より～

NHK-Eテレ教養歴史番組「先人達の底力～知恵泉（ちえいず）」での番組制作に当たり、日本電気協会中部支部ホームページで「中部のエネルギーを築いた人々」に連載されている日本の電力王・福沢桃介と日本初の国際女優を紹介する記事についてインタビューを受けた。

本放送・「福沢桃介編」は2024年7月30日(火)22:00～22:45、1年後の2025年10月21日(火)22:00～22:45アンコール放送があった。

これらの番組制作に当たり、番組ディレクターがどのような事項について関心を持って制作を進めていったのか、その質問と回答内容などの感想を報告する。



福沢桃介

1968(明治元)～1938(昭和13)  
1924(大正13)年、大同電力外債募集のため米国に出張、ユニオン大学より理学博士(ドクトル・オブ・サイエンス)を授与(出典：福沢桃介翁伝)

## I 番組概要

### 1 番組の趣旨

「人材を育てるには？」「組織を発展させるには？」…など人々が社会の中で直面する様々な課題は、先人たちが取り組んできた問題と通底します。彼らは様々な知恵によって壁を突破してきました。当番組では歴史上の人物の活躍をVTRにまとめて紹介、現代の関心事に即しスタジオでトークしながら、先人の「知恵」を振り返ります。

### 2 今回のテーマ：「福沢桃介」

貧しい農家の次男から、電力王と呼ばれるまでに出世した大企業家・福沢桃介。大正～昭和まで日本の近代化を駆け抜けたシンデレラボーイは単なる「成り上がり者」を超えた「経営の鬼才」でした。その立身出世の極意を学びます。

### 3 出演者

司会：高井正智

《NHKアナウンサー》

ゲスト：加來耕三

《歴史家、作家、テレビ・ラジオ番組の出演で活躍》

伊藤正裕

《大型蓄電池の開発・生産するパワーエックス社を創業》

山之内すず

《タレント、女優、ファッションモデルなどで活躍》

番組の中で、加來耕三先生の「歴史に学び未来を読む」の歴史観について共鳴した。

伊藤正裕社長の蓄電池メーカーは、これからのエネルギー産業を担う事業家である。今後ともトークで指摘されたように「魅力・努

力・運」を活かして事業を展開して欲しいと期待する。

山之内すず氏は逆境の経験を活かし、タレ

ントの道から多くのことを学ぶことができたという言葉が印象に残る。

## Ⅱ 智恵その1：「幸運を自分の力と錯覚するな！」

福沢桃介の生涯は

### 1 川越の麒麟児と呼ばれた青少年時代

岩崎桃介は、1867(慶応3)年に岩崎紀一・サダの二男として埼玉県川越市に近い荒子村で生まれ、7歳の時に村を出て川越に移住した。父は提灯屋から、この地に設立された第八十五銀行の書記に採用された。

桃介は美少年、その上頭脳明晰で、小学校では首席を通した。小学校卒業後1年間、漢学塾に通い、続いて川越中学に進学した。当時から、川越の神童と称され、地元の人々の奔走によって慶應義塾に入塾した。

福沢諭吉と妻・錦との間には4男5女の9人の子供に恵まれ、非常に子煩悩であった。慶応で初の運動会を開催した当日、目立つライオンのシャツで颯爽とした桃介が福沢諭吉家族や2女・房の目に止まった。

桃介は、1885(明治18)年、福沢諭吉家に入籍・養子となり、福沢に改姓、そして念願であったアメリカへ留学し、帰国後、諭吉の2女お房と結婚、幸運なあゆみであった。

(ディレクターからの質問)

桃介はアメリカの留学で得たものは何か？それがその後の彼の人生にどんな影響を与えたのか？

(筆者からの回答)

留学で得たものは、3つ挙げられる。

- ① イーストマンカレッジで簿記など実学を学んだこと。
- ② ペンシルベニア鉄道会社で車掌の体験、鉄道網の視察など、将来日本の基幹産業となる鉄道事業の経営を学んだこと。
- ③ 親日家・モリス夫妻の知遇を得て交際術を身につけ、交友を広めたこと。また、三菱3代目社長となる岩崎久弥の友達とハリ

ソン7代目アメリカ大統領の就任式の見学などで岩崎久弥との交際が始まったことなどがあげられる。

### 2 福沢房と結婚、北海道炭礦鉄道に就職

福沢桃介は1889(明治22)年、福沢房と結婚、北海道炭礦鉄道に就職、月給は諭吉の威光もあって破格の100円、初任地北海道に勤務後、東京支店に転勤、アメリカで学んだ知識を活かしたモーレッツ社員生活を送るが、1894(明治27)年8月、自分の進言で石炭輸送船を購入したたんしんまる膽振丸の船上で咯血した。桃介は休職して肺結核療養のため1894(明治27)年、養生園、さらに1900(明治33)年に再発し大森八景院で療養した。病の身に妻と子ども二人を養うには、寝ていて頭だけを使って金になる仕事はないかと思いついたのが株取引であった。不治の病と言われた肺結核治療中に株式相場を始め、株の予測、読みでの確な売買を繰返し利益を上げ、山師、兜町の飛将軍と呼ばれ、生涯相場師としての虚像がつきまとうようになった。その後、300万円近く儲けると相場から身を引き虚業から抜け出すために事業を企画し実業家に転身した。

### 3 北海道炭礦鉄道時代の特筆する功績

1904(明治37)年、井上角五郎に勧められ北海道炭礦鉄道に再入社し、秘書室長の職名で井上の懐刀として活躍した。ここでは1908(明治41)年、わが国初の民間企業による外資導入、英貨債発行(100万ポンド=約1,000万円)に成功した。そして1910(明治43)年、井上は日英共同プロジェクト・北海道炭礦汽船、英国アームストロング・ウィットウオース会社、ピッカース会社の3社共同出資により日

本製鋼所(資本金:1,000万円)を室蘭に設立した。

これらの外債発行の体験が、大同電力外債2,500万ドル1924(大正13)年に第1次大同電

力外債15,000万ドル、翌年、東京帝国ホテルにて第2次外債1,000万ドルを調達することができた。

### Ⅲ 智恵その2:「目標を決めてしまえば遠回りも怖くない！」

#### 4 丸三商会の設立

1899(明治32)年、東京・京橋に丸三商会を設立した。この会社は北海道の材木を中国に輸出することを主体にした商社で、神戸と小樽に支店を置き、神戸支店長に松永安左工門を抜擢した。福沢諭吉もこの会社に2万5千円を出資した。

丸三商会に横浜の米国貿易商会からシベリア鉄道に総額20万円ばかりの注文があった。今で言う数十億円の商談である。この仕事を軌道にのせようと為替を三井銀行に依頼し、米国貿易商会に前貸しするという約束もできた。

米国貿易商会は、丸三商会・福沢桃介の信用程度を東京興信所に照会した。

東京興信所は相場好きで「信用絶無」「資産僅少」の信用調査書を提出、取引中止となった。当時、三井銀行専務理事は中川彦次郎、東京興信所長は森下岩楠(塾の先輩)で、事前に諭吉に相談したと思われる。

(ディレクターからの質問)

丸三商会の倒産時に桃介は、信じている友人たち(慶応出身の人々)に裏切られたと言っています。そこには福沢諭吉の意向、もしくは意向はなくても周りの人々の諭吉に対する忖度のようなものはあったと思われませんか？(筆者からの回答)

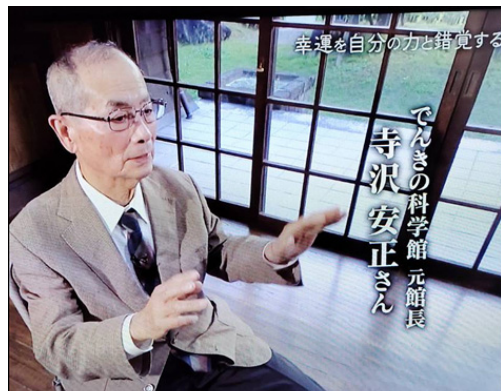
福沢諭吉の意向、福沢諭吉への周囲の忖度があったと思います。

丸三商会は、主に北海道の木材を輸出する商社で、福沢諭吉もこの会社に2万5千円を出資しました。丸三商会は、シベリア鉄道から鉄道敷設の枕木を扱うという総額20万円

の商談をしていました。そこで桃介の信用調査の依頼を受けた東京興信所が桃介は「信用絶無」「資産僅少」と書いたことが、倒産のきっかけになりました。

その背景には、桃介の妻の父である福沢諭吉の、桃介への不満がありました。

2女・房の夫である桃介の放蕩ぶりや、株取引などを行うことを、福沢諭吉は嫌っていました。銀行や興信所のトップは福沢諭吉の親戚筋や、慶應義塾の関係者で、不満がたまり怒り心頭に達していたので福沢諭吉を重んじ桃介にお灸を据えようと考えたとされています。



インタビューで解説する筆者

#### 5 福沢諭吉先生との確執

桃介は福沢諭吉先生を最も偉大で尊敬する人物として見ている。しかし諭吉と桃介の生き方、考え方には大きな相違があった。特に品行のこと、相場に関する好悪、麻雀遊びの好悪などである。これらのことで丸三商会が倒産すると、諭吉先生から厳しく叱責された。この時、桃介は死を覚悟して家を出た。当時、福沢家と縁を切るつもりだったといわれる。

義父は愛娘を大事にしない桃介を好きになれなかったのかもしれない。

また、桃介は福沢家の養子になったが慶應義塾出身者として優遇されず、慶應義塾は敵であるという考えを持つようになった。このように、桃介は衝撃を受け福沢家を出ると、松永安左衛門に相談した。しかし人生で一番尊敬する恩師を裏切ることはできず、妻の房とも離婚しないで過ごした。

このような苦悩の中で再び嚔血して療養の生活を送った。ただ、同時に桃介の大きな飛躍につながったことも事実で、「金銭は親子といえども他人である」ことを悟り、その後の事業を展開していった。

## 6 政友会で1期の国会議員

1912(明治45)年5月、千葉県選出代議士に当選、当初、政友会に所属し憲政擁護の立場から活躍した。しかし、桃介は表裏の多い政治家が自分の性格に合わないと感じ、1914(大正3)年に衆議院が解散されると再び立候補せず政界を引退した。

## 7 本格的に電気事業に参入

1909(明治42)年、名古屋電灯の株を取得・筆頭株主になり、翌年常務取締役役に就任、当時、反名古屋電灯の地元有力事業家や東京の財界が出資した名古屋電力の吸収合併をわずか2週間でまとめ、辣腕経営を発揮した。しかし名古屋財界から警戒感が強まり辞任したが経営が悪化、株価も低迷が続き、再度株主の間から桃介の登場を求めた。その後、桃介は1914(大正3)年、名古屋電灯社長に就任、1920(大正9)年に大同電力社長に就任。1924(大正13)年に日本で初めての大井ダム、大井発電所を建設、日本の電力王になった。(ディレクターからの質問)

名古屋電灯と名古屋電力の合併を桃介は成功させますが、それ以前の交渉と何を交えたことで桃介は成功できたのですか？

(筆者からの回答)

福沢桃介の信条は資本主大事・株主本位で、は終始一貫していました。一企業に留まらず国家や文化に至るまでの大きな未来図を描いていたことが違いだと思います。多くの株主から資金を得て事業を興し、そこで儲けた利益を拡大再生産の事業に展開しました。桃介は、協力しあうことで国を富まし、さらに文化事業の発展(現在のメセナで帝国劇場の建設などに尽くしました)。

### (1) 名古屋電力の設立

名古屋電力は東京財界・名古屋財界連合で、木曾川の岐阜県八百津に発電所を建設する計画を東京・名古屋の資本家が出資に応じ、1906年(明治39)に設立された。相談役の大株主として東京の渋沢栄一らが名を連ね、社長に奥田正香(名古屋商業会議所会頭を務め名古屋の渋沢栄一と言われる)が就任したが八百津発電所一萩野変電所一南武平町変電所の工事が難航し、資金難に陥った。

### (2) 福沢桃介は1909(明治42)年、名古屋電灯の大株主になり、翌明治43年専務取締役に就任、経営のトップに立った。そして名古屋電力との合併を2週間でまとめた。

合併当時の比較

	名古屋電灯	名古屋電力
資本金	265万円	425万円
発電所建設	長良川発電所：4,200 kW	八百津発電所：7,500 kW(工事中)
供給区域	名古屋市内の電灯／電力需要	名古屋市内の電力需要家(未開業)

この合併は、増資後の資本金を750万円(名古屋電灯：250万円・名古屋電力500万円＝名古屋電灯1株・名古屋電力2株(合併比率1対2))として、合併後の配当減少に備えて、その差額を配当補充金として積み立てることで合併交渉を2週間でまとめた。

### (3) 名古屋電灯の長良川発電所：4,200kW・名古屋電力八百津発電所：7,500kW(工事中)、また、名古屋電灯は電灯・電力需要家に供給、名古屋電力は電力需要家のみ供給(未開業)であった。

(4) 名古屋電灯は明治政府の武士救済事業の勸業資金で設立され、1889(明治22)年に開業した。この年は名古屋市政施行また東海道線が新橋から神戸まで開通した年でもある。1910(明治43年)年に関西連合博覧会を名古屋の鶴舞公園で開催、長良川発電所4,200 kWを建設し会場を照明で飾った。武家商法とも言われながらも名古屋市内の電灯・電力需要家に供給し配当も出していた。

一方、名古屋電力は東京財界・名古屋財界連合で、名古屋電灯の競業会社として、木曾川の岐阜県八百津に発電所(出力:7,500kW)を建設する計画に東京・名古屋の資本家が出資に応じた。1906年(明治39)に設立(資本金:500万円)され相談役の大株主として東京の渋沢栄一らが名を並べ、社長に奥田正香(名古屋商業会議所会頭を務め名古屋の渋沢栄一と言われる)が就任した。

このように資本金、発電所出力に差があったが、八百津発電所の工事が難航し、資金不足に陥った。

名古屋電灯の大株主になり乗り込んだ桃介は、両者対立の不利を述べ、合併の必要性を説明、説得に努め、最終的に合併比率2対1で合意、わずか2週間でまとめるなど辣腕ぶりを発揮した。

## 8 大同電力設立、木曾川水系の電源開発

福沢桃介は1914(大正3)年、名古屋電灯社長に就任、1920(大正9)年、木曾川水系・九頭竜川水系の電力を関西方面に供給するため大阪送電、木曾電気興業、日本水力の3社が共同団結して設立された大同電力社長に就任した。

1921(大正10)年に着工した大井発電所ダム工事は、1923(大正12)年に発生した関東大震災のあおりを受け資金調達ができなくなった。このため単身アメリカに渡り、ジロンリード社から1回目として1,500万ドルの社債発行に成功、1924(大正13)年に完工することができた。このほか木曾川水系に、1917(大正6)年から1926(大正15)年の短期間で7か所の発電所を建設し、凡てが現在も運転されている。

桃介は1927(昭和2)年に腎臓の摘出手術を受けた。この頃から体力の衰えを感じ始め、翌年、実業界からの引退を決意した。これまで名古屋電灯、東邦電力、大同電力など我が国の電力の四分の一を占めた会社の社長、役員を全て辞め、隠遁生活に入り、10年後の1938(昭和13)年渋谷の本邸で波乱の人生を終えた。

## Ⅳ 番組制作に当たったの質問事項(参考)

番組ディレクターから多くの質問を受け、相互に内容を理解するために質疑を続け番組制作の一部に反映された。

### 1 日本の電気事業の始まり

日本の電気事業は発明王・エジソンの指導により発展してきた。1887(明治20)年に東京電灯、1889(明治22)年に名古屋電灯、大阪電灯が一般供給を開始した。各会社の技師長が電気主任技術者として建設にあたった。

- ① 東京電燈技師長—藤岡市助(日本のエジソンといわれる)
- ② 名古屋電灯技師長—丹羽正道(エジソンに会って指導を受ける)
- ③ 大阪電灯技師長—岩垂邦彦(エジソン研究所に勤め、NECの前身を創立)

その後1951(昭和26)年、9電力体制発足までの電気事業の変遷は次のとおりである。

## 日本の電気業の変遷

1878	明治11	エジソン電灯会社設立 東京虎ノ門工部大学校でアーク灯を点灯（3月25日：電気記念日の由来）
1879	明治12	エジソン白熱電灯を実用化（10月21日：あかりの日の由来）
1882	明治15	ニューヨーク・パルストリートで火力発電による電灯事業開始 ニコラ・テスラ エジソン研究所に入る（後にフォードも入る） エジソンー直流ー GEー沸騰水型原子力発電所（発明王） テスラー交流ー WE（現在 WH）- 加圧水型原子力発電所（交流の父）
1887	明治20	東京電灯（第2電灯局：出力：25kW）が運転開始（日本最初の一般供給用発電所）
1889	明治22	大阪電灯・京都電灯・名古屋電灯開業ー民間主導型 大阪電灯・交流システムを採用（藤岡市助・岩垂邦彦らの交直論争）
1890	明治23	藤岡市助、白熱社（東京電気ー芝浦製作所と合併し東芝）を設立
1891	明治24	蹴上発電所（出力：160kW）供給開始
1893	明治26	福沢諭吉 時事新報に「水力利用」と題して水力発電立国論を展開
1895	明治28	京都電気鉄道会社・日本で最初の営業電車（塩小路踏切～伏見町） 浅草発電所に三相交流式50Hz 発電機導入・日本で50・60Hzを採用
1896	明治29	二相交流システムがナイアガラ瀑布発電所で採用され長距離送電に成功
1907	明治40	高圧長距離送電の幕開け（駒橋発電所送電開始）
1913	大正2	東京電灯・東京市電気局・日本電灯の三電競争（1917年まで）
1914	大正3	猪苗代発電所（出力：37,500kW）～東京間115,000v送電開始（228km、当時世界第3位）
1916	大正5	福沢桃介 電気製鋼所（現在：大同特殊鋼）を設立
1919	大正8	福沢桃介 大坂送電設立
1921	大正10	福沢桃介 大同電力設立
1922	大正11	東邦電力発足
1923	大正12	関東大震災発生 大日本送電株式会社の設立を計画（福沢・松永、超電力連携構想の一環）
1932	昭和7	五大電力会社により電力連盟発足
1933	昭和8	日本の電気事業者数・日本におけるピークとなる818
1938	昭和13	電力国家管理法成立・翌年日本発送電設立 福沢桃介逝去
1941	昭和16	配電統制令公布施行・翌年9配電会社発足
1942	昭和17	エンリコ・フェルミ 実験炉で核分裂の連続反応に成功
1950	昭和25	ポツダム政令として電気事業再編成令・公益事業令公布
1951	昭和26	9電力体制発足（民間による発電・送電・変電・配電一貫体制） アメリカ実験炉による原子力発電（出力：1kW）に成功
1956	昭和31	原子力委員会発足、原子力3法施行
1957	昭和32	日本原子力研究所第1号実験原子炉（出力：650kW）完成
1963	昭和38	東海研究所で日本初の原子力発電（原子力の日の由来、出力：12,500kW）
1965	昭和40	電源開発会社、佐久間周波数変換所運転開始（変換容量：300,000kW）
1979	昭和54	北海道・本州間直流連携設備運転開始（連携容量：150,000kW）

## 2 福沢桃介と中部経済圏

桃介は水力発電の電源開発を進めながら、その消費量の拡大を図る必要があると考えた。このため電力を大量に消費する重化学産業を計画、中部経済圏の礎を築いた。

桃介が、大正年間に関与した主な企業は、

- (1) 名古屋電灯(現：中部電力)——取締役社長(大正3年)に就任。同社は、東邦電力、中部配電を経て中部電力に至る
- (2) 電気製鋼所(現：大同特殊鋼)——取締役社長(大正6年)に就任。同社は大同製鋼などを経て大同特殊鋼に至る
- (3) 愛知電気鉄道(現：名古屋鉄道)——取締役社長(大正3年)に就任。その後、東海電気鉄道の取締役社長(大正8年)に就任し、両社が合併し名古屋鉄道に至る

- (4) 東海電極(現：東海カーボン)——相談役に(大正7年)に就任。東海カーボンに至る
- (5) 東海曹達(大正5年)、昭和曹達(昭和3年)、矢作工業(昭和8年)を設立。3社の社長は長男の福沢駒吉が就任。1944(昭和19)年に合併し東亜合成に至る
- (6) 名古屋瓦斯(現：東邦瓦斯)——1907(明治40)年に事業を開始、1922(大正11)年、東邦瓦斯の設立時に関与
- (7) 矢作水力(大正8)年、矢作工業(大正8年)、矢作製鉄(昭和13)年に設立されたが、1998(平成10)年倒産

このほか、桃介が起業した企業は下記のように名古屋を中心に重化学工業など近代産業のリーダーとして活躍した。

### (参考) 福沢桃介が携わった主な企業

	会社名	創立	社長	資本金	備考
電気製鉄	電気製鋼所	1916	下出民義	50	現：大同特殊鋼
	木曾電気製鉄	1918	福沢桃介	1,700	現：大同特殊鋼
	大同製鋼	1921	福沢桃介	100	現：大同特殊鋼
	矢作製鉄	1937	福沢駒吉	500	1998年：倒産
電気化学	東海曹達	1916	福沢駒吉	100	現：東亜合成
	昭和曹達	1928	福沢駒吉	150	現：東亜合成
	矢作工業	1933	福沢駒吉	300	現：東亜合成
電気鉄道	愛知電気鉄道	1910	岩田作兵衛	100	現：名古屋鉄道
	東海道電気鉄道	1919	福沢桃介	500	現：名古屋鉄道
	北恵那鉄道	1922	村瀬末一	200	現：北恵那交通
その他	東海電極製造	1918	寒川恒貞	50	現：東海カーボン
	名古屋セメント	1918	村瀬末一	80	1992年：豊国セメントと合併
	名古屋栈橋倉庫	1920	下出民義	360	1906年：解散・道徳地区開発

## 3 福沢桃介君追憶碑

名古屋市千種区覚王山にある日泰寺山門の右手に「福沢桃介先生之碑」が建てられており、この碑には桃介の生涯とその功績が仁徳を偲んで記述されている。

その全文は

「福沢桃介君は天縦の奇才にして其国家社会に貢献したる事業は卓抜広大明治大正の経済史に特筆大書せらるべきものなり

君は埼玉県人にして慶應義塾に学び其前半生は東京を舞台として飛揚したるに係らず後半生の気力精神は全く中部日本に向かって費やされ君の遺業によりて恵沢を受くこともっとも多きは中部日本なるは不思議の遭遇と云わざる可からず

福沢君が中部日本に関心を懐くに至りしは明治42年名古屋電灯会社に関係したるに始まる当時の電灯会社は灯火の供給を以て主要

なる営業とし且つ主として火力に依頼せしが福沢君はまず方針を一変し或は電力に或は電熱に電力利用の境域を拡大するに勉め一転して広く化学工業を誘起し而して之に依じて電源を増大せんことを図り各所に水路を開き堰堤を築きて水力の利用に勉め此の如くして増大したる電力を送致するがために大送電線を作り再転して幾他の電力会社を増設す

尾張信濃の溪谷を千万年間黙々として啞流し茫々として盲走したる河水は之より灯火電熱となりて幾百万の家と戸々に光明と温暖を与え電力となりて大小幾百千の工業を誘起するに至る斯くて春水の四沢に満つるが如く名古屋の人口は増加して日本第三の都会となり

後年此の電力は更に大阪地方に侵入して其の工業に至大なる衝動を興ふるに至る数十年前誰か信尾の溪水に此の如き偉力を蔵するを知らんや唯だ福沢君の慧眼騰気のみ能く此啞流盲走の水を駆使して電力文明を開展す

中部日本に於て今福沢君を追憶して其の鴻業を礼讃するの聲盛なるもの偶然にあらざるなり茲に下出民義君の唱道により福沢君の旧友が力を合して碑を建て君を記念せんとする

に會うて名古屋地方に大造ある君の事績を書して以て記となす」

この碑は、桃介が没してから3年後の1940(昭和15)年11月に、下出民義(明治から大正時代にかけて名古屋に近代産業を興しリーダーとして活躍、また東邦学園の創立者として知られる)が發起世話人となり、当時の大同電力・東邦電力・名古屋鉄道・矢作製鉄・大同製鋼の5社が協賛して建てられた。撰文は「二千五百年史」の著者で歴史学者の竹腰興三郎、書は書道芸術員創立時の發起人の一人である野本白雲である。



福沢桃介君追憶碑

#### 4 年譜（川上貞奴・福沢桃介）

川上貞奴	和暦	西暦	福沢桃介
	明治1年	1868	埼玉県比企郡吉見町で生まれる
東京・日本橋で生まれる	明治4年	1871	
	明治6年	1873	川越中学3年生から慶応義塾に入学
	明治9年	1876	福沢家と養子縁組
	明治10年	1877	アメリカに留学(2年8ヶ月滞在)
	明治12年	1879	北海道炭鉱鉄道に入社
新派の川上音二郎と結婚	明治17年	1884	結核で療養生活
	明治18年	1885	株取引で千円の元手を10万円
	明治21年	1888	王子製紙取締役就任、利根川水力発起人総代
わが国最初の女優「貞奴」となり、国内外で活躍	明治22年	1889	京橋に丸三商店設立(約1年後閉店)
	明治24年	1891	福沢諭吉歿す 北海道炭鉱鉄道に再入社(約5年余勤務)

帝国女優養成所設立	明治41年	1908	博福電気軌道設立発起人、 豊橋電気㈱取締役就任
	明治43年	1910	名古屋電灯㈱取締役、常務取締役に就任
川上音二郎死去	明治44年	1911	
	明治45年	1912	千葉県選出の代議士に当選 (政友会公認・1期3年)
	大正2年	1913	再度名古屋電灯㈱常務、翌年取締役社長に 就任
	大正3年	1914	愛知電気鉄道株式会社取締役社長に就任
女優引退	大正6年	1917	電気製鋼所設立、翌年取締役社長に就任
名古屋市北区に川上絹布㈱を設立	大正7年	1918	東海電極製造㈱設立、相談役に就任 木曾電気製鉄㈱設立、取締役社長に就任
名古屋市東区に二葉荘を建設	大正8年	1919	矢作水力㈱設立、相談役に就任 (社長：長男の福沢駒吉) 東海道電気鉄道㈱取締役社長に就任 大阪送電㈱設立、取締役社長に就任
	大正9年	1920	大同電力㈱社長に就任
	大正10年	1921	関西電気㈱社長に就任、12月辞任 大同製鋼㈱を設立、取締役社長に就任
	大正11年	1922	東邦電力㈱相談役に就任 東邦瓦斯を設立(名古屋瓦斯を合併) 北恵那鉄道㈱取締役社長に就任
川上児童劇団結成	大正13年	1924	
	大正15年	1926	天竜川電力㈱取締役社長に就任 帝国劇場㈱取締役会長就任 東京に別荘「桃水荘」を建設、東京に転居
	昭和3年	1928	実業界から引退
	昭和6年	1931	貞照寺地鎮祭に臨席
岐阜県各務原市鷺沼に貞照寺建立	昭和8年	1933	
東京に転居	昭和12年	1937	
	昭和13年	1938	東京の渋谷本邸で死去
熱海で死去	昭和21年	1946	

(寺沢 安正)